

ひまわりからの メッセージ

157号

2025. 1. 20

NPO ひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター

発行人: 中野たみ子

臘梅に寄せて



新しい年がまた巡って来ーに。皆さんはどの様なお正月だったでしょうか。

私は今年も例年のごとく近くの神社に初詣に出かけました。わが家から神社までの道すがら臘梅が植えてあるお宅の横を通ります。例年はお正月に見事な花を咲かせているのですが、今年はまだ咲いていませんでした。おそらく気候変動が原因なのでしょう。そういえば、秋の実りも変でした。岐阜名産の富有柿にカメムシが大量発生し、実りも遅くなっていました。お正月を過ぎてても食することができたのは、私には嬉しいことでしたが、様々なところで異変が起きているのでしょう。正月早々、しのび寄ってくる見えないものの脅威を感じさせられたことでした。元旦から二週間を過ぎて、やっと隣家の臘梅が咲きはじ

めました。我が家の老木はとくに枯れてしまいました。車の出し入れの際にお隣りの花を鑑賞させていただけのも幸せなことです。

ろう梅というと、黄色の中心に紫の花被片があるのが一般的なのでしょうが、私は黄色一色の素心ろう梅に心惹かれます。本当にろう細工の様だなあと思いつつ見入っています。花を見てると京都の寺で出会ったことばが思い出されます。

花は黙って咲き、

だまそ散ってゆく

そうして再び

枝にかえりない

けれど

その一時一處に

この世の全てを

抱えている

一輪の花の聲であり

一花の花の真である

永遠に滅びぬ

命のようさびか

悔なくそこに輝いてる

ということもあります。人と人との出会いを大切にしていきたいものです。

私たちの命も宇宙の歴史から見れば、花の一瞬に等しいのかもしれない。その一瞬の命をどう生きていくのか……今年もそんな課題を心の隅に置きながら一日一日を大切に生きていけたら良いなあと思うのです。それにしても最近、年賀欠礼の葉書や病床にあるという遠来の友からの文も多くなりました。でも「袖振り合うも多生の縁」

読書の勧め



皆さんは、どの位本を読まれますか？

私は緑内障が進んだこともあって右目と左目のバランスが悪く、読むのが億劫になってきました。そんな自分のことを棚に上げて、今回は皆さんに本の紹介を試みたいと思います。(私流の解釈も含めて……)

ディスレクシア

『マーガレットスウリング著
人文書院』

近年、LD(学習障がい、限極性学習症)のことが注目を集めるようになりました。知能に問題はないのに、読み書きや計算、推論することなどに困る子ども達です。特に読み書きについては意外に多くの子どもたちが困っています。「発達性ディスレクシア」は、LDの一つのタイプと考えられますが、この本では、「神経生理学的原因に起因する」と考えられている様なのです。耳や目などの感覚器の障害や環境要因によるものではなく、生来的な中枢神経系の問題だととらえています。

ディスレクシア(Dyslexia)のディスは困難、不全、レク

シアは語い・辞書という意味になるようです。ですから、ディスレクシアの読みの特徴として「読み誤りが多く、時間がかかる。逐字読み。初めての文章の読みの困難。拗音の習得の困難。漢字の読み誤り。音読や黙読に時間がかかる」でしょうし、そのことが読みだけでなく書くことの困難にもつながっていきます。

私たちは、ことばをどの様に習得していくのでしょうか。生まれたばかりの赤ちゃんは、まず聞くことから習得していきます。自分に話しかけられることばを通して、又、生活の中で様々な支援を受けながら、ことばと物の名、ことばと動作などの結びつきを知っていきます。そうしてことばの理解が一つの語くらいになつてはじめて、「マンマ」「プー」などの有意味語が出てくるのです。もちろん話すためには体の発達や口腔機能の発達、人との共感関係なども育っていることが大切ですが、聞くことばの少なさは、子どもの語いや発語の遅れにもつながっていきます。そして、その次に文字の認識です。幼児は文字を固まりとして認識しているのですが四歳児になると、そのことばはいくつの音からできているのかがわかって来ます。つまり音韻認識です。日本語は一つ一つの文字でモーラとして認識しています。英語では一文字一文字ずつ音素として認識していくのです。日本語であれば「と・け・い」と三モーラですが

英語では例えば library ジャー・i・b・r・a・r・y となるのでエルとアールの音を別の音としてイメージする難しさがあります。ディスレクシアの困難さが音韻認識にあることを考えると日本語より英語の方がはるかに難しいと言えるでしょう。

この本には、様々な仮説が書かれていますので、聴覚情報処理や視覚の問題など考えさせられることも多々あります。

次にご紹介するのは、感覚統合の本です。保育や教育を学んで来られた先生方にとっては、別の世界の話かもしれませんが、育てにくい子や困りのある子との関わりづらさの理由がわかると、接し方も変わるでしょう。

保育者が知っておきたい

発達に気になる子の 感覚統合

木村 順著 (学研)

この本は感覚統合の基礎 本当にわかりやすく、読みやすく書かれています。私も何度か「ひまわりかうのメッセージ」に書いてきましたが、この本は本当にわかりやすいです。

感覚統合理論を体系づけたのはアメリカの作業療法士のエアーズという人ですが、彼女は「脳に入ってくる様々な感

覚情報を整理して秩序だったものにしていくのが感覚統合である」と言っています。子どもたちに見られる触覚防衛反応や触覚の鈍さ、平衡感覚の統合のつまり、固有覚の統合のつまり、ボディイメージのことなどケースを示しながら解説してあるので、「だらしない、やる気のない子」とか「やんちゃで手がつけられない子」などと決めつけていた子の困りの本当の意味が分かってくるでしょう。保育の中でのいろいろな遊びの紹介もありますから、参考になるのではないでしょう。

小学校で困ることを減らす

親子遊び 10

木村 順著 小学館



この本も感覚統合に基いた本ですが、主に親子遊びの具体例が示されています。保護者の方にも参考にしていただいて、親子遊びを楽しんでもらいたいと思いますが、療育や保育、学校の通級の先生方にも目を通していただきたいのです。トランポリンの跳び方一つにしても、「トランポリンで跳ばせています」と言わずに、どう跳び方、跳ばせ方が大切なのか、自分の実践を振り返ってみてほしいと思います。漫然と自分流に子どもがジャンプをしていても効果は

ないということです。大人が、子どもの脇をしかり支えて子どもが一人で跳ぶよりも高く跳ばせること、大人も子どもも体の軸をまっすぐにすることなど、注意事項も書かれています。自分は何も手をかけずに子どもをジャンプさせておけば良いというのではないわけです。

落ち着きのない子であれば登校前の五十分、一〇〇回位を跳ばせることで学校で半日位は落ち着いていられるとのことですが、若いお父さんやお母さんたちに、それだけのフアイトやエネルギーがあるのかどうか……ちょっと不安ですね。

トランポリンのほかにも回転椅子を使った遊びや手探りゲーム、などなど、ポジショニングゲーム、タッチあそび等々ヒントとなる遊びが書かれているので参考にされるといいでしょう。

公園からブランコやシーソー、ジャンクルジムなど、色々な遊具が撤去されてしまいました。どの遊具も子どもたちの体のバランスや空間認知、ボディイメージを育てていく大切な遊具だったのに……と残念に思います。かくれんぼや押しくらまんじゅう、お手玉や綾取りなど昔なつかしい昭和の遊びが子どもたちの体や手指の発達に一役買ったんだよねあと今更ながら思います。

世の中は便利になり、その便利さに慣れた私たちは何を失っていくのでしょうか。感覚統合の本を読みながら、これからの子ども達の行く末に思いを馳せています。「支援が必要」とされる子どもたちが増えつつけている現状を、どの様に考えていくのでしょうか。こども家庭庁に期待……？、文科省に期待……？、

へ来年度に向けて✓

三学期になりました。今年度のまとめの時期です。家庭でも学校・園でも支援の見直しが必要です。自分でやらせると時間がかかるかと言って、何でも手伝ってやってしまいませんか。支援をしている、助けているつもりが実は子どもの自立を妨げているかもしれません。今一度「支援は引き算」ということを思い出して、自分のことは自分でできるようにしていった方がいいね。

<2月の予定>

17日 センター親の会

12日 支援センター
会議

18日 ヒアサポート

成人相談

4日 養老町

7日 垂井町

10日 揖斐町

28日 池田町

